917
6111

朝日 75.4.30 1600字 2/may 夕 ×印

論壇

「覇権」の意味するもの

朝日 75.4.30 改めて考えてみたい中国の伝統

竹内　実

手もとの辞書をひくと、「覇権」のひとつの意味として、〝覇者の地位のこと〟というのがあがっている。いまの日本語では、「覇者」というのは、〝競技や競争の勝利者〟をもっぱら指しており、悪い意味はない。「制覇」、「覇権を握る」などもそうで、むしろ誇らしげなイメージさえ、そこにはある。

だが、いまさらいうまでもないことであるが、もともと古代中国においては、武力で天下を統一した権力者が「覇者」であり、その武力至上主義が「覇道」であった。いずれも尊重されなかった。そして、反対に尊敬されたのが、「王者」であり、「王道」であった。『孟子』にも、「力をもって仁を仮(か)る者は覇たり。覇は必ず大国を有(たも)つ。徳をもって仁をおこなう者は王たり。王は大を待たず」とある。

「珈琳玩孔」運動を展開した中国が、いまさら儒教色の濃い「王道」をもちあげることはありえないが、一九七三年ごろからしきりに引用されている毛沢東主席の指示も、「覇権」を否定しており、そこには、伝統的な観念、すなわち「覇道」否定の観念がはたらいているように、みえる。指示は「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、覇権を求めない」と一般訳にされているが、最後の一句の原文は、「不称覇」、(覇を称す。これからのち、世界文化の前途にたいして、つまるところ、西洋覇道の手先となるか、東洋王道の牙城(がじょう)となるか、それはあなたがた日本国民が詳しく研究し慎重に選ばれることにかかっているのであります、と。

このような、伝統的な、また、近代中国の苦渋のにじんだ、「覇道」、あるいは「覇権」があって、「覇権主義」という新造語が生まれたといえよう。

「覇権主義」という新しい表現がわれわれの意識にのぼったのは、一九七二年二月の、「米中共同声明」、いわゆる「上海コミュニケ」からであろうが、当時の日本の新聞は、これが読者になじまない表現であることを考慮してか、〝支配権〟と訳した。英語原文では、単純に〝ヘゲモニー〟となっているので、翻訳というわけではないが、北京発行の日本語版『北京周報』が、〝覇権主義〟とはっきり訳したのは、原文いらいの苦渋と抵抗をこめたものとみられる。

中国は、たしか昨年、ソ連の対外政策、とくにアジアにおける集団安全保障の企図にたいして、「覇権主義」と呼んだことがある。また、アメリカとソ連がむすんで第三世界をおさえつけようとするうごきがでてくると、「二つの超大国」の「覇権主義」とよんでいる。「大国覇権主義」という場合もある。その具体的内容にふれたものとしては、一九七三年十月、国連総会における喬冠華代表団長の演説がある。そこでは「海洋覇権」問題にかんし、発展途上国による「帝国主義と大国覇権主義の掠取、略奪、ダンピング、独占」に対する反対への支持が表明されている。

「日中友好条約」における「覇権」条項がいろいろに取沙汰(とりざた)されている。だが、われわれとしては、これを提案した中国が、かつて、「覇権」や「覇道」による侵略の苦しみをうけながら、にもかかわらず(あるいは、であるがゆえに)、「覇権を求めない」と自ら固くいましめているそのことを、ここ百年の日本と中国の関係に照らして、考えるべきではないだろうか。

(京都大学人文科学研究所教授・現代中国論)